
彼女と僕と××と

白雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女と僕と××と

【Nコード】

N5366Y

【作者名】

白雅

【あらすじ】

さあ、春からは一人暮らし！
と意気込んでいたのにまさかの不動産屋のミスで二重契約?!
彼女と僕はこうして出会った。

美少女で小悪魔な彼女と地味に色々と凄い彼の同棲(?)学園(?)
変態(?)……………ectラブ。

よくありがちなシチュエーションで王道を目指します。…早くも王道でいけない気がします。

題名に意味はありません、多分。
不定期更新です。
作者は飽き性です。

最初の悲劇

「これは困りました…」

僕は今、一つ年下らしい美少女と言って差し支えないどころかお釣りがくるような人と一緒に頭を悩ませていた。

この理由を語るには時間を三時間と少し前まで巻き戻さねばならない。

冬の肌寒さを残しながらもしつかりと春の蕾が開き始める三月上旬。

通学に三時間掛かる所詮は有名私立高校に入学して一年が経っていた。

そして今日は門出の日と言う事もあり僕は何時になく浮かれた気分で電車に揺られていた。何時になく浮かれた、と言うのは僕は自他ともに認める感情表現の乏しさに原因があるのだが理由はきちんとあった。……今日、この日から僕は一人暮らしをする事になっていたのである。

僕が通う高校は日本でも珍しい「世間一般からは「学園都市」と呼ばれる街にあった。

前述した通り、高校には三時間かけて通っていたが一年通いつめた結果、結局「生活に支障あり」と見なし親に一人暮らしを玉砕覚悟で提案してみた。

それが案外すんなりと承諾されあれよあれよと言う間に決まりここまでトントン拍子にここまでできたのは良かった、のだが……

——ここまで上手く行き過ぎると怖いものがあるな。後は悪い事が起こるだけとかやめて欲しいんだが。

大概に俗に言うヘタレと称される僕は浮かれた気持ちがある反面半分は不安でいっぱいだった。

電車を降り地図に則って、前、下見に来た時の記憶等頼りながら辺りを見回す。

洒落た店や喫茶店が立ち並ぶ此処は、僕には少々合わない気もするが小綺麗な街と言うのは別段悪いと言うわけでもない。合わないかも知れないが、こう言う景観の良い洒落た小綺麗な街が嫌いと言うわけではなくどちらかと言うと好きな部類に入る。

考え事をしながら歩けば六階建ての黒い建物が見えた。その建物の四階こそが今日から僕の住まいとなるマンションであり丁度引越しのトラックも着いたらしい所だった。

また、僕が頼んだ業者とは違う所のトラックもあったがこの季節だ。春に控えて入学する者や僕のような者など沢山居るだろうし特に問題視はしなかった。

トラックの元まで小走りで今日、お世話になるだろう業者に声を掛けようと思った矢先。

「はあ?!二重契約?!」

遠目から見ても美形だと断言できる容姿をもった少女が携帯片手に何かを叫んでいた。

・・・何故だろうな、嫌な予感しかしない。

先ず、業者に訪ねてみようかと話し掛ける。

「今日はよろしくお願ひします。…ところで彼女は?」

僕が問えば業者は気まずそうに口を渋る。

・・・益々嫌な予感しかしない。

「ああ、よろしく…だが、言いくいんだが先客がいてな?」

こう言う場合どうすれば良いのだろう、予感が確信に変わりそうだ。

「そのようで、それがどうかしましたか?」

業者は苦虫を噛み潰したような顔になりこう言った。

「その先客って言うのが彼女で、どうやら君と同じ部屋に引っ越すらしい。」

予感が確信に変わる。

「・・・最悪だ。」

それから、彼女に確かめると彼女は今不動産屋に確認をした所でどうやら、手違いがあり二重契約をしてしまったようだ。

これから部屋を探すと言われたが多分この季節では無理だと思う。春に向けて引越しの真つ最中だ。空いている良い物件があるとは考えにくい。

一先ず引越し業者の人には話がつくまでどっかで暇を潰してもらい、僕らは互いが新居になるだろうと思っていた部屋に足を踏み入れた。

「まさか、二重契約なんて…！」

はあ、とため息を尽きながらもまだ憤りが抑えられないのか語気を荒くする彼女を宥める（なんて事をする場合でも無いのだが美形は怒ると怖いのだ。）為に話題を変える。

「事情は良く分かりました。ところで貴方の名前は？」

彼女の容姿に感嘆しながら聞く。

近くでみると際立ってその美少女加減がわかった。

色素の薄い茶色の髪は艶やかに光り、髪と同じ色の目は大きくパツチリとしている。

「ああ、自己紹介をしてなかった…私は小鳥遊たかしな 癒蘭ゆらん。新年度から

高1。今日此処に引越す筈だった。のに…」

二重契約で問題発生か…大変だな。

半ば容姿に見とれながら彼女の返事を聞いて思ったのは一つ年下には見えない位大人びていると言う事位か。

「貴方は？」

そう言えば僕もまだ自己紹介が済んでいなかった。女性に先に名乗らせるとか僕もまだまだダメな若造らしい。

「すいません、自己紹介が遅れましたね。僕は門脇かどわき 弓紫嗣ゆじへと言います。本年度から高校二年生、貴方と同じでこの部屋に住む筈でした。」

そして話は冒頭に戻る。

二番目の悲劇

「これは困りました…」

これからって時にこう言う事が起きるのは僕の体質なのかもしれない。…去年の秋もそうだった。

「門脇くんはこれからどうするつもり？」

どうするつもりっ、て……………」

「…小鳥遊さん、貴方は此処に住めなくなって困る事はありますか？」

「ああ…うん。日本では住む場所が無くなっちゃうかな。」

苦笑する彼女が嘘を着いているように見えなかった。これが演技だと言うのなら相当な腕前だな。

曰く、彼女は中学の三年間をアメリカで過ごしていた帰国子女らしい。それにしては日本語が達者だ。

曰く、実家はあるものの埃を被っていて使い物にはならないらしい。流石に女子一人で一家などを掃除するのは難しいだろう。

曰く、両親は夏まで帰ってこれないらしく此処に住む以外に住む場所がない、と。。。

「そうですね、じゃあ僕は「あ！」「は？」

僕は、の後には引きません。と言う言葉が続く筈だったが、それを小鳥遊さんが許す事は無く。てか、あ！ってなんだ、あ！って。

名案でも思いついたように彼女の瞳が輝く。

…嫌な予感がする。そして僕の嫌な予感は的中するものらしい。「小鳥遊さん、何かありましたか？」

「うん、これでいいんじゃないかな？」

「それはどう言う意味ですか？」

「ルームシェアしよう！」

ああ、悪夢だ。これは悪魔との契約だ。

すっかりその気になっている目の前に居る彼女を横目に僕は天を

仰いだ。

この時ばかりは無神論者の僕も神の慈悲を願った。のと同時に不動産屋を心から呪った…当然だと思う。

「反論は？ないね、ないよね！」

言いたいことは山ほどあるが。

それを言おうとする前に彼女は先手を打ってきた。

「リビング、キッチン、バス…二つ部屋があるんだから一つずつで…うん！」

「何がうん！何ですか…？」

怖くて出来るだけ聞きたくないのだが。

「リビングとキッチンとバスは共同スペースにして丁度部屋が二つあるから分けちゃえば良いのよ！」

さも名案だと言う彼女に僕は抵抗する気力も無く、

…こうして彼女と僕の同居生活が始まった。

「あー！ダメダメっ！！そのテレビの角度はもう少し右斜めー！」
彼女の罵声が飛んで僕はテレビを右にずらす。

「うん、そこ！よーし。」

工事現場かなんかの指揮官にでもなったつもりか。まあどうでもいいか。

僕らは今、共同スペースになっているリビングに家具を配置している最中である。

共同スペースに置く物は二人の持ち物の中から劇選し、黒と白を基調とした部屋が出来上がるうとしていた。

「にしても、こんなに大きいソファを一人で使うつもりだったんですか？」

男の僕が横に寝そべっても、まだ一足分は余裕があるであろう黒のソファを見ながら彼女に尋ねる。

「いやー、お父さんが欲しい物は何だ？って聞いてきたからソファが欲しいって言ったらこれくれたの。」

んー、と首をかしげながら苦笑する姿は中々に目の保養だ。

話は戻るが、この共同スペースにある家具の殆どは彼女が持ち寄った物である。

話の端々から聞き取れる限り彼女は良いとこのお嬢様らしいし、僕の家具が彼女の家具より質が低いのは仕方ない事だろう。

視線を感じそちらを向くとこちらを見つめている彼女と目が合った。

「どうかしました？」

「いや、あの、実は、ね？」

一言一言区切るのは何故だろう。

何故、恥ずかしそうにしているのだ。

「えっと…お腹空いちゃった。」

ああ、そう言う事か。

時計をみれば丁度一時だった。

「分かりました、近くの喫茶店にでも入り遅めの昼食と行きましようか。」

・
・
・

「へえ、門脇くんは早生まれなんだねー。私と三ヶ月しか変わらない

わけだ。」

彼女は、ペペロンチーノを口に運び感心したように言う。
もうそろそろ食べ終わるな。

「まあ、そうなりますね。」

何故か、彼女と殆ど歳が変わらないと思うと不思議な感じがするな。

「まあ、くだらない事は置いて。折角の門出の日にルームシェアをするなんて思ってもいませんでしたよ。」

何か悪い事が起こりそうな予想はしていたんだが。

僕がそう言えば彼女は何かに気づいたように顔をしかめた。

「あつ…嫌だった？」

…それは返事に困るな。

こんな美少女と一緒に嫌な男は居ないと思う。

でも咄嗟に顔に出てしまったのだろう。彼女は言い訳するように肩を竦める。

「まあまあ、こんな美少女と同じ屋根の下で暮らすんだから役得だと思つて…ね！ほらあわよくばあんな事もこんな事も！」

「ありませんよ。」

「ちえつ、門脇くんは釣れないね！。」

どうやら彼女は一癖も二癖もある性格の持ち主らしい。全く良い性格をしている。

「さあ、そろそろ戻って各自部屋の片付けと行きましようか。」

「うん！ごちそうさまでした！」

その後…会計で少し揉めたが思いつき僕が押し通したおかげか彼女が財布を出す事はなかった。

女性に財布を出させるのは御法度だと教え込まれていたし、これから何かと協力していく事になるのだ。この位安いものだろう。

部屋の片付けをしているとノックする音がする。

「門脇くん、良い?」

「どうぞ。」

ガチャ、と扉が開きおずおずと彼女が顔を出す。

「どうかしましたか?」

「…へっ?!…あ!うん、お風呂いれたけど門脇くん入る?」

彼女の反応が遅れる…何かこの部屋に珍しいものでもあっただろうか?

「いえ、後もう少しで終わるので終わらしてしまいます。小鳥遊さ

ん、先に入ってください。」

「うん…分かったそうする。」

そうして扉が閉まった。

…僕の胃に穴が空くまでどの位だろうな?

三番目の悲劇

「ふう。」

なんとか部屋の片付けが終わった頃。

リビングに出てみるとまだ小鳥遊さんは風呂からでてないようだ。

部屋に気配もないし。

「まさかまさかの、美少女、ねえ。」

残念ながら殆どの男が喜ぶであろうシチュエーションを僕は素直に喜ぶ事は出来ない。

美少女には、良い思い出がないのだ。

しかも、彼女は一癖も二癖もある性格の持ち主ときた。

：僕のガラスのハート（死語か？）も冷静沈着なんて言われる位には強度されてるが、これは忍耐力の方も極める事になりそうだ。

リビングのソファに腰を下ろす。

うん、彼女に部屋の配置を任せて正解だったようだ。落ち着いている感じがする。

目を閉じて十秒息を吸い込む。次に少し息を吐き出し三秒間止める。最後に七秒使って全部の息を吐き出す。

何か考え事をする時はこの呼吸法を取ると落ち着いて考えられるのだ。

後ろでガチャリ、と扉の開く音がする。

「……ああ、小鳥遊さん。出たん……!？」

後ろを振り向くとタオル一枚の姿の小鳥遊さん。

「ごめん。着替え忘れちゃった!でもまあ、サービス?」

「何馬鹿な事言ってるんですか。さっさと部屋に行ってください。因みにこの時の僕はもう、小鳥遊さんとは間反対の方向を向いていた事をここに記しておく。ヘタレ?ヘタレってなんだ。当然の反応だ。」

まあ、一つ分かった事は…

「早急に忍耐力の強化をしないとな。」
ぼそりとつぶやきが落ちた。

「ハローグモニンっ？朝ですよーっつ？」
バタン、と扉が開きドスン、と体に重みがかかる。

「はい、もう起きるので降りてください。」

三月半ば、丁度僕らが同居（？）し始めて半月経った位から、小鳥遊さんは”毎朝”僕を起こしにくる。

最初こそ朝から美少女など目の毒だと思っていたし、小鳥遊さんにも心臓に悪いと抵抗を試みたのだがこの頃は…ぶっちゃけ慣れた。
「新学期早々つれないなあ。」

むう、と頬を膨らませる小鳥遊さんの言葉で僕はやっと今日から新学期だと言う事に気づいた。

「いつもの事でしょう？貴方まだ着替えてないじゃないですか。僕も着替えるので着替えてきてください。」

「あつ朝から制服でなんて門脇くんも大胆ね！」

顔を赤らめて言う小鳥遊さん。ナニがどうしたって？

「…ふざけてる事言ってるよと禿げますよ。」

「女の子に禿げるとか酷いっ。」

「僕は酷いですよ。」

そのまままきていたシャツを脱ぎ始めれば彼女は大慌てで出て行った。

全く・・・初心なのか手馴れているのかよく分からないな。

着替え終わって部屋を出るとまだ小鳥遊さんは着替え中の様だ。

「ま、当たり前のことでしょうね。」

制服と言えど…女性の支度に時間がかかるのは何処に行っても同じだ。

食卓に座り小鳥遊さんを待つ。

ふむ、今日の朝ご飯は味噌汁、ご飯、納豆、だし巻き卵。素晴らしい。これぞ日本食だ。

僕らは家事を分担してやる、と言っていたはずなのだが…小鳥遊さんは食事に洗い物、あろうことか洗濯まで（何とは言わないがすごく気まずい。）サラッとやってしまう。

流石に、僕の方も彼女に任せっきりは不味いと思ひ掃除だけはやらせてもらってるが。

「あ、待たせちゃったね。ごめん！」

通りの良い声が聞こえ

どうけいやまがくえん

「あれ？門脇くんって霜慶帖学園だったの？高等部…だよな？」

どうやら神様は何処までも非情らしい。

机を挟んだ僕の目の前には僕と同校の制服をきた小鳥遊さんが立っていた。

「学園」第一話「春」

「ちょっと!?!門脇くんどうしたの?」

「いえ、なんでも。小鳥遊さんはそのまま食べていて良いですよ。」
急いで朝ご飯を食べ、自室の部屋を軽く掃除してから、学校へいく。

「何で学校行くこうしてるの?!」

「どうやら僕は貴方を勘違いしていました。なので僕らは一緒に登下校をしないけません。」

「は?!」

「とにかく、僕は、学校で、貴方と…会ってはいけない存在です。」

「意味わかんない!」

「それで結構です。」

小鳥遊さんの疑問は至極当然なことだ。

だが、それを僕が取り合わないのは同じ高校へ通うならその理由が簡単に分かるからだと思ったからだ。

「・・・本当、どうしちゃったの?私と行くのは嫌?」

若干涙目である小鳥遊さんを見る。

「そのうち理由は分かるでしょう。学校では決して声をかけない様に。」

そう一言残すと、僕はそのまま家を出た。

爽やかな朝の空気と普段ならまだ比較的早い時間だと言うのにも
う集まっている生徒達を横目に、僕はクラス発表の掲示板へと足を
運んだ。

「人が多すぎて見えないな……」

平均値より5cmばかり高い身長は、この人ごみの中ではあまり
役に立たなかった。

「門脇くん。」

後ろから呼びかける声がする。

「あ、玄野じゃないですか。もしかしてクラス発表もう見ましたか
？」

僕より頭一つ分小さい玄野げんのゆきあき雪秋は去年のクラスメイトである。

性格は至って温厚。趣味も合う。

僕の少ない友人のうちの一人だ。

「うん！また同じクラスになれたみたいだね。後、涼宮と倉野さん

…八「雪秋！」

玄野が最後の人物を言う前にそれを遮った人物が居た。

「涼宮…良いんですよ、もう蛍華との事は終わったんですから。」

すすみやかある涼宮香。僕の幼馴染である色男だ。

コイツとは昔からの付き合いで、小中高と全て同じクラスである。

世話焼きで僕の我儘に付き合ってくれる良い友人とも言える。

「お前、まだそんな事言ってるのか？」

「そんな事も何も本当の事ですよ。」

朝の爽やかな空気が僕たちの間だけ険悪な空気になる。

「ま、まあまあ。折角今年も同じクラスになれたんだ。朝っぱらか
ら喧嘩はやめようよ、ね？」

それも玄野の一言ですぐ解かれた。玄野はアレなのだ、一部女子
達が猛烈に喜ぶ…シヨtじゃなかった癒しキャラなのだ。

「それもそうですね。に、しても…思った以上に少ないですね？」

「音楽科で理系の選択するやつなんか殆どいねーよ。その中からクラス別れるんだ。普通だろ。」

それもそうか。

僕らの学校は少々特殊で

普通科・音楽科・特進科

にわかれた後、文系学科、理系学科、技術学科にわかれる。

その後にも細々別れたりするのだがまあ、それは後々に。

大体の音楽科は文系に行くのが主なので僕達、音楽科理系学科は少々めずらしい。

「今日からまたよろしくお願いしますね。」

「こちらこそ。」

「当たり前だろ。」

波乱万丈で波瀾万丈な一年が、また始まるうとしていた。

「学園」第二話「春」

新学期早々授業：なんて事があるはずもなく、入学式からの始業式と言つ流れで式が終わつた後、ロングホームルームがあり、軽く自己紹介をする。この場合

「門脇弓紫嗣と言います。趣味は読書、よろしくお願いします。」
又は

「玄野雪秋です。特技は速記です。これから一年間よろしくお願ひしますね。」

又は

「涼宮だ。体を動かす事が好きだな。これからよろしく」
などがあつた。

皆一様に名前・趣味（又は特技）・一言、の流れであるが、まあ仕方ないだろうとも思う。

初対面で自己紹介とも言われれば自分の事をベラベラとしゃべる様な者はこのクラスにはいなかった。

そしてそれらが全て終わった後：

「弓紫嗣。」

凜とした、女の声である。

帰り支度をしていた手を止めて声のした方を向いた。

「何ですか、貴女からとは珍しいですね？^{けいか}蛍華。」

予想通りの人物だ。

僕の視線の先には、小鳥遊さんとは少し違う、だがやはり美人と言われる類の女性が立っていた。

「そうかしら。」

美人が首を傾げて思案する顔は良いな。うん。

「そうですよ。」

しばし、互いが無言になる。

沈黙の間は彼女とだとあまり煩わしいとは考えられなかった。

「あああああんたつつ!?!」

そんな沈黙をいきなり破る、少女の甲高い声。

声の方を見れば小柄な少女がいた。

「なんですか、倉野さん。」

彼女は倉野風花。去年クラスが一緒だった人物であり…

僕たちが会話をしている間に殆どの生徒が帰ったが、教室に僅かながらも生徒はいるのだ。

少しは考えて欲しい。

「なんですかって何よ! あんた、八菱さんにした事分かっててやってるの?!」

八菱螢華。才色兼備、冷静沈着。彼女はこの二つの言葉を併せ持った女性だ。容姿は、彼女が道を歩いていたら道にいた人が脇まで一斉に寄るくらい美しい。

ただ、僕が入学する前にこの人は入学し、そして退学してから、また僕が入学する時にこの学校に入学すると言う面白い経歴を持つ人だ。…理由は謎のままだが。

「さあ、過去の事でしょう。」

あ、不味い。

つい、涼宮の時の様にあしらう様に言ってしまった。

…これは、不味い。

「過去の事って…!」

「煩いわよ、小鳥がピーチクパーチクと…弓紫嗣の言う通り過去の事をずつと気にしているお前が悪いのよ。本人達の問題よ、これは。お前が出る幕ではないわ。」

「…っ! 八菱さん…すいません。ですがっ…!」

「後、弓紫嗣はもう逃げたわよ。」

あの男は一瞬不味いと言う顔をした後サラッと逃げた。

「あ、あ、あ、あいつうううっ!」

風花の絶叫が二年校舎に響き渡った。

「学園」第三話「春」

「あ、危なかった。」

あの場に居続けたら絶対に倉野爆弾は避けられなかっただろう。さつき絶叫が聞こえてきた。

結局、蛍華が言いたかった事は分からなかったが…あの状況だ。致し方ないだろう。

丁度、黒い六回建ての建物が見えてきた時

「小鳥遊さん…？」

どうしてか、小鳥遊さんの姿があった。彼女は少し拗ねている様にも見える。

そして、こちらの存在に気づくと『だっー』っと言う効果音がつきそうなくらい凄いスピードで走ってきた。動きが俊敏で若いな…運動神経、相当良いんじゃないだろうか。

「遅い！」

開口一番それか。朝の事で相当不満が溜まっている様に見える。

「すみません。帰り際に少し捕まっしてしましました。」

「……………」

「……………」

それでも彼女はむくれるのをやめない。…頬をつねってみた。

「おお。」

伸びる伸びる。

「ってやめんかった！」

一瞬和んでいた空気が小鳥遊さんのツッコミでまた戻る。

「やっぱり、誤魔化されてはくれませんか。」

「当たり前でしょっ！」

残念だ。

「そうですね、でも直に分かりますよ。」

それでも不満な様子の小鳥遊を見てそれに、と付け加える。

「それを知ってから話しても遅くは無いでしょう。」
「むう。」

さっきよりは、まだマシか。

彼女が僕の言った言葉の意味を理解するのは三日先の事だった。

朝である。

「朝だよ門脇くん!!」

飛びつかれる感覚。

「今、起きました。」

言外にどいて欲しいと言つ旨を伝えると彼女はあっさり退いてくれた。

小鳥遊さんは、朝が早い。そして朝に強い。

彼女が部屋を出て、着替え始める。

食卓に付き、二人で食べる。

・
・
・

「クラブ？」

「そう！門脇くん、クラブ入ってる？」

「一応、入っていますが…幽霊部員と言いつとこるです。何故？」

作成中

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5366y/>

彼女と僕と××と

2011年11月20日19時13分発行